「訴訟は本日で終わり」

背筋伸ばし支援感謝

家永さん

「家永訴訟は本日をもちまして終わることになりました」。判決後、東京・永田町の憲政記念館で会見した東京教育大名誉教授家永三郎氏[illegible]は、三十二年にわたる裁判闘争を締めくくった。

この日午後二時すぎ、小柄な体を灰色のスーツに包んで支援者と一緒に最高裁へ。ステッキをついてゆっくりと正面階段を上がる。支援者の方を振り返って、手を振り建物の中に入った。

長期闘争を締めくくる言い渡しはわずか二分。「七[illegible]部勝訴」などの検定意見を違法と認定した。記者会見では壇上のいすに背筋を伸ばして座り、しっかりした口調で「わたしのような微力な人間が闘い続けてこられたのは熱烈な支援者があったから」と支援者に感謝した。

判決に触れて「これで違法な教科書検定は四カ所になった。検定に違法があることを最高裁が認めたことは軽視できない」と言及。一方、判決を受けて記者会見した文部省の月岡英人教科書検定課長は「判決を厳粛に受け止めております」と判決を早口で読み上げた月岡課長。「訴訟の対象となった検定意見のうち半分が違法とされたが」といった質問に「厳粛に受け止めて」と答弁に終始。「厳粛に受け止める、とはどういう意味か」との質問にさえ、神妙な答えの末に「厳粛に受け止めております」と答え、失笑を買った。

長い闘いの成果が実り、笑顔で記者会見する原告の家永三郎氏＝29日午後、東京・永田町の憲政記念館

川端、三島書簡公表へ

昭和文学史に新事実　自決の覚悟も示唆

日本文学を代表する二人の作家、川端康成氏と三島由紀夫氏の間で約二十五年間にわたって交わされた未発表を含む往復書簡の全ぼうが、二十九日までに明らかになった。

三島氏は川端氏に認められて文壇デビューし、後年は共にノーベル文学賞候補となるなど師弟でありライバルでもある密接な関係だった。書簡の中には、三島氏が「小生が怖(おそ)れるのは死ではなくて…」など自決を示唆した手紙も含まれており、昭和文学史に新事実を書き加える貴重な資料となりそうだ。この往復書簡は近く発売の「新潮」十月号に掲載される。

書簡は九十四通。川端氏側の手紙はほとんどが公開されているものだが、三島氏側の手紙は初公開のものが中心。三島氏が一九七〇(昭和四十五)年、川端氏が七二年、相次いで亡くなった後、両家でコピーして交換し合ったことから双方に残っていた。

六五年、六七年と二度にわたり三島氏の名はノーベル文学賞候補として浮上した。川端氏は三島氏にノーベル文学賞への推薦状を依頼。六八年に川端氏がノーベル賞を受賞した。川端氏の受賞後約一年半、二人の書簡は途切れている。

三島氏が自衛隊市ケ谷駐屯地で自決する前年の六九年夏、同氏は「小生が怖れるのは死ではなくて、死後の家族の名誉です」「死後、子供たちが笑はれるのは耐へられません」などとする覚悟の文面を送っていたことも今回明らかになった。

自決直前の七月六日付では「時間の一滴々々が葡萄(ぶどう)酒のやうに尊く感じられ、空間的事物には、ほとんど何の興味もなくなりました」とする文面を残していた。その後、最後となった手紙は、川端氏が焼却したため、残っておらず永久に幻の手紙となっているといわれている。

書簡は終戦間近の四五年三月から七〇年の三島氏自決の直前までにわたっている。最初の手紙は四五年三月、三島氏から小説「花ざかりの森」をもらった川端氏のお礼。以後、三島氏が自分の将来の夢と野心を語った文面、東京大空襲の記述など双方が戦争末期の雰囲気を生々しく語っている。

それ以後は、古典や心霊術的世界への関心など両者の文学的世界への関心が一致し、師弟関係を築いていく様子が双方の手紙からうかがえる。三島氏は「英霊の声」などナショナリズム的傾向を強めていったが、川端氏はこうした傾向も評価していた。

火の手40メートル　大量の煙

水橋の廃車火災

消防50台　ヘリも投入

7千台の山　発生から一昼夜

二十九日午前零時ごろ、富山市水橋五郎丸、「豊富産業」(高倉可明社長)車両センターのスクラップ置き場で、約七千台の廃車の山が燃え出した火災は、大量の煙を出しながら一昼夜燃え続けた。富山、滑川、上市、魚津、立山消防署からポンプ車や化学消防車など約五十台が消火にあたり、県消防防災ヘリも昨春の導入以来初めて火災現場に投入された。三十日午前一時現在、火勢は弱まっているものの、まだ鎮火には至っていない。

現場は国道8号沿いの上市川左岸。対岸の滑川市有金の住民が見つけ、通報した。廃車は十㍍以上の高さで約二百㍍にわたり、約七千台が積んであった。上市川の堤防側から燃え出し、一時は火の手が約四十㍍の高さにまで上がった。煙やにおいは、数㌔の広範囲にまで及んだ。

滑川署の調べでは、工場は二十四時間稼動しており、出火当時、従業員四人が勤務していた。だれも出火には気付かなかったという。鎮火を待って、事情聴取にあたる。

同社によると、廃車は隣接する工場で破砕し、鋼材にするため積んであった。バッテリーやエンジン類は取り外してあるが、シートなど内装部分は付けたままになっていた。「遅くとも午後八時ごろには工場に出入りする門を締め、深夜の従業員以外の出入りはない」と話している。

現場は周囲が水田で延焼の恐れはないが、煙で視界が悪くなることがあり、現場近くの8号では通行中のドライバーに徐行を促した。

高所放水車などで消火活動に当たる消防署員＝富山市水橋五郎丸、豊富産業車両センターのスクラップ置き場、29日午後8時30分撮影

疲労にじませ懸命の消火

出火から一昼夜を経てなお燃え続ける廃車火災に、上市町をはじめ富山、滑川、魚津市、立山町から消防車約五十台、消防署員・団員延べ四百人以上が投入され、連携して消火に当たった。署員らは過去に例のない長時間の消火活動に疲労の色をにじませながらも、懸命に放水を続けた。

各市町の消防本部、消防署は同社敷地内に仮設テントの合同指揮所を設け、猛然と煙を上げるスクラップ置き場を目前にして消火活動に臨んだ。廃車の山は高さ十㍍あり、火の手は広範囲に及んでいる。さらに現場の北東側が上市川堤防に面し、消防車が乗り入れできない。各消防は連携して現場を三方から囲むように放水したが、消火活動は難航を極めた。消防車のエン[illegible]し、現場に給油車を呼び、燃料を補給しながらの放水が続く。二十九日朝からは化学車二台が合成界面活性剤を散布したが、圧縮された廃車の中のプラスチックが燃えているため、思うような効果が出ない。昼までに方針を切り換え、大量の水で火勢を押さえ込む手法に切り換えた。消火に合わせて重機でスクラップを崩して分断し、延焼を防ぐ作業も行われた。

夜に入って勢いはややおさまったが、スクラップの山は依然として煙を上げている。電源照明車の光の下、さらに放水が続けられた。指揮所に詰める富山市消防本部の篠輝虎次長は「これだけ長い消火活動は経験がないが、一刻も早く鎮火に持ち込みたい」と話していた。

県が汚染防止　活動と影響調査

県生活環境部は二十九日、富山市水橋[illegible]の廃車火災現場に環境政策課、同保全課の職員延べ六人を派遣して汚染防止対策にあたり、近くの用水を一時的に止めて水田に油が流入するのを防いだほか、上市川の魚類への影響を調べた。同部は三十日にも職員二人を派遣し、現場周辺の水質や水田への被害を調査する。

内部抗争の可能性

山口組系組長射殺

尼崎で不審な白い車目撃

神戸市中央区のホテルで二十八日、指定暴力団山口組ナンバー2の宅見勝・宅見組組長(六一)が射殺され、巻き添えで歯科医が重体になっている事件で、山口組直系団体の関連企業のものとみられる白い乗用車が、兵庫県尼崎市内で緊急配備で警戒中だった警官の姿を見て、急に進路を変えて走り去っていたことが二十九日、兵庫県警生田署捜査本部の調べで分かった。

捜査本部は、襲った四人組が銃撃現場から白い車で逃走したこともつかんでおり、どちらの車もトヨタ車とみられることから同一の可能性が高いとして乗っていた人物や行き先を捜査。内部抗争との見方を強め、大阪府警と協力して報復などの動きを警戒している。

調べでは、警戒中の警官が記憶していた車のナンバーを照会したところ、神戸市内の山口組直系団体の系列で、大阪市内の関連企業が所有する車と一致した。

現金輸送車の300万円強奪

北海道　短銃の3人組

二十九日午前十一時五十五分ごろ、北海道中標津町東三条北二丁目の北海道拓殖銀行中標津支店裏の駐車場で、三人組の男が日本通運釧路支店の現金輸送車を襲撃、短銃を発砲し、現金約三百万円などが入ったジュラルミンケース一個を奪って乗用車で逃走した。道警は強盗事件とみて中標津署に捜査本部を設置、三人の行方を追っている。

大型トラックが走行中出火、全焼

朝日の北陸道

二十九日午後六時四十分ごろ、朝日町境の北陸自動車道下り線で、山形県村山市河島、運転手、高橋雅一さん(三五)の走行中の大型トラックから出火。トラックと積み荷の医療用バリウム四百袋(十㌧)を全焼した。現場は対面通行区間で、朝日―親不知IC間は上下線とも四時間近く、通行止めになった。

入善署によると、高橋さんはタイヤが破裂したような音がしたため、境PA出口の流入加速車線に停車して確認したところ、右後輪の内側のタイヤから火が出ていた。タイヤの摩擦熱で漏れていたオイルに引火した可能性もあるとみて、原因を調べている。

志賀原発核燃料　輸送は10―12月

北電、自治体に連絡

北陸電力は二十九日、石川県と志賀町、富来町に対し、志賀原子力発電所1号機の新核燃料を十月から十二月の間に輸送すると文書で連絡した。新核燃料は来年一月中旬に予定している定期点検時に交換する。

輸送する核燃料は燃料集合体八十体。二酸化ウランの濃縮度の高い高燃焼度燃料で、年一回の定期点検時に三百六十八体ある燃料集合体のうち約四分の一を交換している。燃料の搬入は六回目。

今月二十二日、科学技術庁が核物質輸送情報の取り扱いを一部変更したのを受け、今回から輸送に関する情報公開の範囲を広げた。搬出施設は核燃料製造元の日本ニユクリア・フユエル久里浜工場(神奈川県横須賀市)。RAJ型の輸送容器(重量約〇・七四㌧)一個につき新燃料二体(同〇・五二㌧)を格納する。計八十体の新燃料をトラック七台で陸上輸送する。輸送日時や経路などについては引き続き公表されていない。

北電は「輸送の実施に先立ち、道路状況などを事前に把握し、安全運行の徹底を図る」としている。

風車

○…環境保護を訴えて自転車で日本縦断しているALT(外国語指導助手)仲間の米国とカナダの青年三人が二十九日、新潟県から富山入りし、朝日町役場を訪れて職員と交流した。

○…日本縦断しているのは、米国のジェイソン・イーデンスさん(二五)とバーバラ・アレンさん(二六)、カナダのジョール・クレンツさん[illegible]の三人＝写真。七月でALTの任期が切れたため、日本での最後の活動としてサイクリングキャンペーンを企画、八月一日に北海道稚内市を出発した。

○…三人は役場職員との交流会で、使い捨て社会や町にあふれる自販機など具体的な問題を挙げ、「環境問題は世界的なもの。帰国する前に何か行動し、多くの日本人に関心を持ってもらいたかった」とライフスタイルの見直しを訴えた。

(第3種郵便物認可) 新聞定価 税込み(朝夕刊共)1ヵ月3894円(朝刊2987円、夕刊907円)1部(朝刊110円、夕刊50円)

火の手40メートル 大量の煙

水橋の廃車火災

消防50台 ヘリも投入

7千台の山 発生から一昼夜

二十九日午前零時ごろ、富山市水橋五郎丸、「豊富産業」（高倉司明社長）車両センターのスクラップ置き場で、約七千台の廃車の山が燃え出した火災は、大量の煙を出しながら一昼夜燃え続けた。富山、滑川、上市、魚津、立山消防署からポンプ車や化学消防車など約五十台が消火にあたり、県消防防災ヘリも昨春の導入以来初めて火災現場に投入された。三十日午前一時現在、火勢は弱まっているものの、まだ鎮火には至っていない。

現場は国道8号沿いの上市川左岸。対岸の滑川市有金の住民が見つけ、通報した。廃車は十メートル以上の高さで約二百メートルにわたり、約七千台が積んであった。上市川の堤防側から燃え出した。黒煙と白煙が交じり、一時は火の手が約四十メートルの高さにまで上がった。煙やにおいは、数キロの広範囲にまで及んだ。

滑川署の調べでは、工場は二十四時間稼働しており、出火当時、従業員四人が勤務していた。だれも出火には気付かなかったという。鎮火を待って、事情聴取にあたる。

同社によると、廃車は隣接する工場で破砕し、鋼材にするため積んであった。バッテリーやエンジン類は取り外してあるが、シートなど内装部分は付けたままになっていた。「遅くとも午後八時ごろには工場に出入りする門を締め、深夜の従業員以外の出入りはない」と話している。

現場は周囲が水田で延焼の恐れはないが、煙で視界が悪くなることがあり、現場近くの8号では通行中のドライバーに徐行を促した。

高所放水車などで消火活動に当たる消防署員＝富山市水橋五郎丸、豊富産業車両センターのスクラップ置き場、29日午後8時30分撮影

疲労にじませ懸命の消火

出火から一昼夜を経てなお燃え続ける廃車火災に、上市町をはじめ富山、滑川、魚津市、立山町から消防車約五十台、消防署員・団員延べ四百人以上が投入され、連携して消火に当たった。署員らは過去に例のない長時間の消火活動に疲労の色をにじませながらも、懸命に放水を続けた。

各市町の消防本部、消防署は同社敷地内に仮設テントの合同指揮所を設け、猛然と煙を上げるスクラップ置き場を目前にして消火活動に臨んだ。廃車の山は広さ十メートルあり、火の手は広囲に及んでいる。さらに現場の北東側が上市川堤防に面し、消防車が乗り入れできない。各消防は連携して現場を三方から囲むように放水したが、消火活動は難航を極めた。消防車のエ

県が汚染防止 活動と影響調査

県生活環境部は二十九日、富山市水橋五郎丸の車火災現場に環境政策課、同保全課の職員延べ六人を派遣して汚染防止対策にあたり、近くの用水を一時的に止めて水田に油が流入するのを防いだほか、上市川の魚類への影響を調べた。同部は三十日にも職員二人を派遣し、現場周辺の水路や水田への被害を調査する。

内部抗争の可

尼崎で不審な

山口組系 組長射殺

神戸市中央区のホテルで二十八日、指定暴力団山口組ナンバー2の宅見勝・宅見組組長(六一)が射殺され、巻き添えで歯科医が重体になっている事件で、山口組直系団体の関連企業のものとみられる白い乗用車が、兵庫県尼崎市内で緊急配備で警戒中だった警官の姿を見て、急に進路を変えて走り去っていたことが二十…日、兵庫県警生田署捜査本部の調べで分かった。

捜査本部は、襲った四人組が銃撃現場から白い車で逃走したこともつかんでおり、どちらの車もトヨタ

家永さん

「訴訟は本日で終わり」

背筋伸ばし支援感謝

「家永訴訟は本日をもちまして終わることになりました」。判決後、東京・永田町の憲政記念館で会見した東京教育大名誉教授家永三郎氏(八三)は、三十二年にわたる裁判闘争を締めくくった。

この日午後二時すぎ、小柄な体を灰色のスーツに包んだ支援者と一緒に老学者は最高裁へ。ステッキをついてゆっくりと正面階段を上る。玄関前で支援者の方を振り返って、手を振り建物の中に入った。

長期闘争を締めくくる言い渡しはわずか二分。「七三一部隊」などの検定意見を違法と認定した。記者会見に臨んだ家永さんは壇上のいすに背筋を伸ばして座り、しっかりした口調で「わたしのような無力な人間が闘い続けてこられたのは熱烈な支援があったから」と支援者に感謝した。

判決に触れて「これで違法な教科書検定は四カ所にもなった。検定に違法があることを最高裁が認めたことは軽視できない」と言及。硬かった表情に笑みが浮かんだ。

一方、判決を受けて記者会見した文部省の月岡英人教科書課長は「判決を厳粛に受け止めております」と無表情にこの言葉を繰り返した。冒頭、小杉隆文相の談話を早口で読み上げた月岡課長。「訴訟の対象となった検定意見のうち半分が違法とされたが」といった質問に「厳粛に受け止めております」という官僚的な答弁に終始。「厳粛に受け止める、とはどういう意味か」との質問にさえ、禅問答の末に「厳粛に受け止めております」と答え、失笑を買った。

長い闘いの成果が実り、笑顔で記者会見する原告の家永三郎氏＝29日午後、東京・永田町の憲政記念館

川端、三島書簡公表へ

昭和文学史に新事実 自決の覚悟も示唆

日本文学を代表する二人の作家、川端康成氏と三島由紀夫氏の間で約二十五年間にわたって交わされた未発表を含む往復書簡の全ぼうが、二十九日までに明らかになった。

三島氏は川端氏に認められて文壇デビューし、後年は共にノーベル文学賞候補となるなど師弟でありライバルでもある密接な関係だった。書簡の中には、三島氏が「小生が怖（おそ）れるのは死ではなくて…」など自決を示唆した手紙も含まれており、昭和文学史に新事実を書き加える貴重な資料となりそうだ。この往復書簡は近く発売の「新潮」十月号に掲載される。

書簡は九十四通。川端氏側の手紙はほとんどが公開されているものだが、三島氏側の手紙は初公開のものが中心。三島氏が一九七〇（昭和四十五）年、川端氏が七二年、相次いで亡くなった後、両家でコピーして交換し合ったことから双方に残っていた。

六五年、六七年と二度にわたり三島氏の名はノーベル文学賞候補として浮上した。川端氏は三島氏にノーベル文学賞への推薦状を依頼。六八年に川端氏がノーベル賞を受賞した。川端氏の受賞後約一年半、二人の書簡は途切れている。

三島氏が自衛隊市ケ谷駐屯地で自決する前年の六九年夏、同氏は「小生が怖れるのは死ではなくて、死後の家族の名誉です」「死後子供たちが笑はれるのは…へられません」などとする覚悟の文面を送っていたことも今回明らかになった。

自決直前の七月六日付では「時間の一滴々々が葡萄（ぶどう）酒のやうに尊く感じられ、空間的事物には、ほとんど何の興味もなくなりました」とする文面を送っていた。その後、最後となった手紙は、川端氏が焼却したため、残っておら

志賀原発核燃料 輸送は10－12月

北電、自治体に連絡

北陸電力は二十九日、石川県と志賀町、富来町に対し、志賀原子力発電所1号機の新核燃料を十月から十二月の間に輸送すると文書で連絡した。新核燃料は来年一月中旬に予定している定期点検時に交換する。

輸送する核燃料は燃料集合体八十体。二酸化ウランの濃縮度の高い高燃焼度燃料で、年一回の定期点検時に三百六十八体ある燃料集合体のうち約四分の一を交換している。燃料の搬入は六回目。

今月二十二日、科学技術庁が核物質輸送情報の取り扱いを一部変更したのを受け、今回から輸送に関する情報公開の範囲を広げた。

搬出施設は核燃料製造元の日本ニユクリア・フユエル久里浜工場（神奈川県横須賀市）。RAJ型の輸送容器（重量約〇・七四トン）…個につき新燃料二体（同・五二トン）を格納する。八十体の新燃料をトラック七台で陸上輸送する。輸送日時や経路などについては引き続き公表されていない。

北電は「輸送の実施に先立ち、道路状況などを事前に把握し、安全運行の徹底を図る」としている。

わかばさん

ジンはかけっ放し。現場に給油車を呼び、燃料を補給しながらの放水が続く。二十九日朝からは化学車二台が合成界面活性剤を散布したが、圧縮された廃車の中のプラスチックが燃えているため、思うような効果が出ない。昼までに方針を切り換え、大量の水で火勢を押さえ込む手法に切り換えた。消火に合わせて重機でスクラップを崩して分断し、延焼を防ぐ作業も行われた。

夜に入って勢いはややおさまったが、スクラップの山は依然として煙を上げている。電源照明車の光の下、さらに放水が続けられた。

指揮所に詰める富山市消防本部の富樫虎次長は「これだけ長い消火活動は経験がないが、一刻も早く鎮火に持ち込みたい」と話していた。

現金輸送車の300万円強奪

北海道、短銃の3人組

二十九日午前十一時五十五分ごろ、北海道中標津町東三条北一丁目の北海道拓殖銀行中標津支店裏の駐車場で、三人組の男が日本通運釧路支店の現金輸送車を襲撃、短銃を発砲し、現金約三百万円などが入ったジュラルミンケース一個を奪って乗用車で逃走した。道警は強盗事件とみて中標津署に捜査本部を設置、三人の行方を追っている。

大型トラックが走行中出火、全焼

朝日の北陸道

二十九日午後六時四十分ごろ、朝日町境の北陸自動車道下り線で、山形県村山市河島、運転手、高橋雅一さん(三五)の走行中の大型トラックから出火。トラックと積み荷の医療用バリウム四百袋(十ト)を全焼した。現場は対面通行区間で、朝日―親不知IC間は上下線とも四時間近く、通行止めになった。

入善署によると、高橋さんはタイヤが破裂したような音がしたため、境PA出口の流入加速車線に停車して確認したところ、右後輪の内側のタイヤから火が出ていた。タイヤの摩擦熱で漏れていたオイルに引火した可能性もあるとみて、原因を調べている。

…能性 白い車目撃

とみられることから同一の可能性が高いとして乗っていた人物や行き先を捜査。内部抗争との見方を強め、大阪府警と協力して報復などの動きを警戒している。

調べでは、警戒中の警官が記憶していた車のナンバーを照会したところ、神戸市内の山口組直系団体の系列で、大阪市内の関連企業が所有する車と一致した。

風車

○…環境保護を訴えて自転車で日本縦断しているALT(外国語指導助手)仲間の米国とカナダの青年三人が二十九日、新潟県から富山入りし、朝日町役場を訪れて職員と交流した。

○…日本縦断しているのは、米国のジェイソン・イーデンスさん(二三)とバーバラ・アレンさん(二三)、カナダのジョール・クレンツさん(二三)の三人=写真。七月でALTの任期が切れたため、日本での最後の活動としてサイクリングキャンペーンを企画、八月一日に北海道稚内市を出発した。

○…三人は役場職員との交流会で、使い捨て社会や町にあふれる自販機など具体的な問題を挙げ、「環境問題は世界的なもの。帰国する前に何か行動し、多くの日本人に関心を持ってもらいたかった」とライフスタイルの見直しを訴えた。

永久に幻の手紙となっているといわれている。

書簡は終戦間近の四五年三月から七〇年の三島氏自決の直前までにわたっている。最初の手紙は四五年三月、三島氏から小説「花ざかりの森」をもらった川端氏のお礼。以後、三島氏が自分の将来の夢と野心を語った文面、東京大空襲の記述など双方が戦争末期の雰囲気を生々しく語っている。

それ以後は、古典や心霊術的世界への関心など両者の文学的世界への関心が一致し、師弟関係を築いていく様子が双方の手紙からうかがえる。三島氏は「英霊の声」などナショナリズム的傾向を強めていったが、川端氏はこうした傾向も評価していた。

遠隔複写申込書（控え）

申込ID： 19421968
申込日： 2025/1/28
利用者ID：E14110992
利用者名：Allen Barbara 様

請求記号：YB-151
タイトル：
北日本新聞

選択した巻号等：
1997年(8月)（通号 16-31日）

記事・論文名： 風車
Kita Nihon Shinbun, August 30.(Traveling thr
ough Japan by bicycle. ALT.)

著者名：

巻号、ページ：
1997,(August 30.) 8月30日 朝刊
39面のみ（1153）

新聞資料のため表紙はありません。

国立国会図書館 関西館 文献提供課 複写貸出係
Tel：0774-98-1313

お問合せの際は利用者IDと申込IDをお知らせください。